

## 沖縄県の離島における 児童の将来展望に関する心理学的研究

目白大学大学院心理学研究科 内間 望  
目白大学人間学部 今野 裕之

### 【要 約】

本研究の目的は、沖縄県の離島における児童の将来展望の内容を質的に検討することである。具体的には、離島に住む児童らが抱く将来展望の内容を把握し、そうした将来展望を抱くようになった背景（理由）について検討を行う。本研究では、児童がどのように将来を展望しているかを、より多面的に把握するため質問紙と半構造化面接で調査を実施した。調査はすべて、協力者一人ひとりに、個別で実施した。質問紙調査では古川・鈴木・内藤（1993）の方法を援用し、各年齢時にやりたいこと・やっているだろうと思うことを文章と絵で記述するよう教示した。次に、質問紙に記述された将来の展望内容や、そうした将来展望を抱くようになった理由について質問を行った。質問紙から得られたテキストデータおよび面接で得られた逐語録をもとに、テキストマイニングを行い、面接時の発話から抽出されたコードについて発達段階ごとに発語数を集計した。その結果、沖縄の離島に住む児童らが抱く将来の職業像はバラエティに富んでいることが示唆された。一方、青年期・前成人期には島を出る・出ない、島に戻る・戻らないの選択に迫られると未来予想を立て、「地元へ帰省する」ということが自分のライフスタイルに大きな影響を与え得るということを感じたうえで将来を展望している可能性があることが示された。

キーワード：将来展望，児童，沖縄，離島，テキストマイニング

### 問題

将来を展望する能力は、教育現場において特に重視されてきた。小学校学習指導要領（文部科学省，2017）では、自身の感情や行動を抑制し、社会や他者との関わり方を学び、よりよい人生を送るために必要な能力の育成を重要な目標の一つとして挙げている。具体的には、総合的な学習の時間の第1目標に、「自己の生き方を考えることができるようにする」と定めている。この目標には、将来を展望する能力の育成も含まれていると捉えられる。こうした能力を育成するために、まずは、児童一人ひとりが将来をどのように展望しているのかを把握する必要がある。他方、将来を展望する能力である時間の展望について、都築（1993）は、過去・現

在・未来の時間的な連続性が意識されることにより、自己についての継続性・統合性の意識がより強まるとしている。こうした意識は、児童らがやがて成長・発達し、青年期になった際に直面する、アイデンティティの獲得という発達課題に取り組み、達成するためにも、重要な視点である。そのため、これまでの時間的展望研究は、主に青年期を対象として行われてきた。都築・白井（2007）は、自著の中で「大学生という文脈を考慮した研究が増えている」と述べたうえで、女子学生は就業または主婦志望との関連で目標に応じた時間的展望を持していること（柏尾，1997）、大学生の時間的展望が未来志向型であり、将来目標への強い動機によって自らの目標が設定されていること（都築，1993）

などの青年期を対象とした実証的研究を複数紹介している。これらの研究から、青年期には時間的展望が拡大し、現実的未来が開けてくることが特徴であることがわかる。一方、北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学グループ(2001)は、小学6年生、中学3年生、高校2年生を対象にそれぞれの年齢で抱く「人生イメージ」について調査を行った。その結果、小学6年生は未来の自己をイメージせず、過去の自己と比較して現在の自己を特徴づけるのに対し、中学3年生と高校2年生は現在の自分を過去と未来の自分と関係づけて捉えることを明らかにした。児童期の時間的展望に関する研究としては、鈴木・内藤・古川(1993)の児童が自分の将来像をライフステージ毎にどのようにイメージしているのかを明らかにした研究も挙げられる。さらに、都築(2007)は9歳から10歳頃を越えると、子どもは未来を見通し、計画的・目的意識的に行動し始めるとする加藤(1987)の研究を紹介したうえで、児童期が時間的展望の発達の起点と考えられると述べている。つまり、児童期の時間的展望は、その発達を把握するうえで避けては通れない重要な時期である。しかし、先述したように、現在の時間的展望研究の対象年齢は青年期が圧倒的に多い。そこで本研究では、児童期の時間的展望に焦点をあてることとする。また、児童を対象とした時間的展望に関する研究はいずれも、首都圏やその周辺に住む児童を対象に行われており、離島に住む児童らを対象とした実証的研究は、筆者の知る限りないと言える。根ヶ山(2012)は、多良間島でのフィールドワークの中で島の子どもたちが「自分は〇〇だから、何歳になったら△△をするんだ」というような、より明確な理由で具体的に将来を展望していることを目の当たりにし、島の小・中学生の時間的展望に関し、「都会の子どもたちの将来展望とは方向が異なる気がする」と自身の見解を述べている。離島に住む小学生の場合、数年後に島を離れるかどうかという選択を迫られる状況におかれており、きょうだいやいとこなど、年齢の近い身内が多いことも含め、普段から家族や周囲の人々と自分の将来について話し合っている可能性がある。したがって、北海道大学大学院教育学研究科教

育臨床心理学グループ(2001)で示された結果とは異なり、より明確な将来展望を持っている可能性が考えられる。離島に住む児童らを調査対象とすることで、あらゆる環境で育つ児童が自らの生き方を考えることを促すことを目的とした教育・養育方法について、新たな可能性を提案することが期待できる。そこで本研究は、沖縄県の離島における児童の将来展望の内容を質的、そして探索的に検討することを目的とする。具体的には、まず、離島に住む児童らが抱く将来展望の内容を把握する。次に、そうした展望を抱くようになった背景(理由)について検討を行う。児童らがどのような将来展望を抱いているかを、より多面的に、かつ欠落なく、網羅的に把握するため、そのため調査者によって予め設定された内容を問う仮説検証型の方法ではなく、調査協力者が自由に表現したイメージを、それに即した形で分析することが可能な探索的な方法を用いることが重要であると考えられる。以上をふまえ、本研究では質問紙と半構造化面接で調査を実施する。さらに、調査で得られたデータを分析するため、文章データを単語ごとに切り取り、定量的な方法で分析し、その結果を視覚化する手法であるテキストマイニングを採用する。視覚化の方法として、1)児童らが自身の将来展望を言語化する際、どの語が頻出するのかに注目する必要があるため、2)頻出語がどのような文脈で語られているか明らかにするために、共起構造を捉えることが可能な共起ネットワークの構築を行う。なお、本研究で調査を行う地域として、1)人口の多い大規模離島であり調査の利便性が高いこと、2)島外進学・就職者の割合が多いこと、という条件を満たす離島を対象とした。

## 方法

### 調査協力者

調査協力者は、沖縄の離島にある一般小学校A・Bに通う、第6学年児男女計11名(男子6名、女子5名 平均年齢11.09歳  $SD = 0.29$ )であった。本研究では小学校第6学年児を対象とするが、その理由としては、児童期から次のステップである思春期への移行期という点で、本学年は児童期の中でも進路や将来の夢について

最も思考する時期であると考えられるためである。Lewin (1951) は、時間的展望の発達は、遠い未来と過去の事象が、徐々に現在の行動に影響を及ぼすようになると同時に、願望と実在との間の区別がよくできるようになることとしている。つまり時間的展望の長さの拡大と、現実と非現実の分化の増大であり、この発達は児童期から青年期へ移行する時期に起こるとされている (都築・白井, 2007)。

調査時期

調査は2018年4月に実施した。

質問紙 (Figure 1<sup>1)</sup>) の構成

B4 縦長の用紙の中央より左には年表、右には2コマの絵を描く欄を設けた用紙を用いた。年表の左端には、13歳、15歳から100歳までの5年毎の目盛をふり、自分がしたいことを自由に書けるようにした。また、右側の絵は、色鉛筆を用いてもよいし、漫画のように吹き出しを書いてもよいことにした。なお、13歳の目盛は2段用意し、1段目を例示、2段目を回答練習用とした。したがって、13歳の欄への回答は、分析対象から除外した。

年齢 (      さい )      誕生月 (      月 )

	やりたいこと・やっているだろうなと思うこと	イラスト
13歳 (例)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バスケ部に入りたい</li> <li>・ 中学1年生になっている</li> <li>・ 勉強をしているはず</li> </ul> <p style="text-align: right;">などなど…。</p>	
13歳		
15歳		
S		
40歳		
45歳		
S		
100歳		

Figure 1 将来展望記入用紙 (古川ら (1993) をもとに作成) 図

## 手続き

本研究では、事前準備として、実際に児童らを対象とした調査を開始する前に、ラポール形成を目的とした事前顔合わせ（交流会）を実施した。交流会では、筆者が作成した、各マスの項目内容が自己紹介となっている双六を用い、遊びを通して、調査者への警戒心や緊張がほぐれるような時間を設けた。双六は色画用紙に色鉛筆やクレヨンなどで当時の話題になり得る人気キャラクター（ミニオンなど）を描いて作成した。双六の各マスの項目内容は、「好きなキャラクター／教科／季節を教えて」といった一般的な質問と、「あなたの長所／あだ名を教えて」といった自己紹介となるような質問と、「中学生の自分にひと言」や「宇宙に行ったら何したい？」といった質問とした。どのマスの項目も、家庭環境や経済状況に言及する必要のない内容にした。また、児童らとの交流会の前に学級担任らとの顔合わせをし、事前に双六の各マスの項目内容を確認してもらい、交流会で使用しても問題がないか否かの判断・確認を行った。そして、実際の調査に際し、本研究では、児童がどのように将来を展望しているかを、より多面的に、かつできるだけ欠落なく、網羅的に把握する必要があった。そのためには、調査者によって予め設定された内容を問う仮説検証型の方法ではなく、調査協力者が自由に表現したイメージを、そ

れに即した形で分析することが可能な探索的な方法を用いることが重要であると考えられた。以上をふまえ、質問紙と半構造化面接で調査を実施した。調査はすべて、協力者一人ひとりに、個別で実施した。具体的な調査手順は以下の通りであった。まず、古川・鈴木・内藤（1993）の方法を援用して、質問紙を実施した。各年齢の時にやりたいこと・やっているだろうと思うことを文章と絵で記述するよう教示し、将来の展望に関する情報を収集した。文章で記述する場合には「箇条書きでも、普通に文章を書いても大丈夫」と伝え、絵で記述する場合には古川ら（1993）に倣い、「イラストを描いても良いし、漫画みたいにセリフを書いても良い」と伝えた。質問紙は個別配布・個別回収形式で行い、回答の所要時間は最大20分間とした。次に、将来の展望として、児童がどのようなものを持っているのか、その内容をより正確に把握するため、また、その展望がどのように形成されたのか、といった展望内容に影響を与える要因を検討するため、半構造化面接を実施した（Table 1）。具体的には、質問紙に記述された将来の展望の内容や、そうした将来展望を抱くようになった理由について質問を行った。たとえば、結婚したい理由やその職業に就きたい理由、働きたい場所などについての質問をした。調査協力者の同意のもとインタビューは録音しながら行われた。

Table 1  
インタビューガイド

依頼	学校への依頼	沖縄県石垣市内の一般小学校A・Bの校長・副校長先生に連絡をとり、第6学年主任同席のもと、対面で調査内容の説明・協力依頼を行った。
	調査協力者への依頼	無作為抽出された児童の保護者に学級担任から電話で、調査の目的・方法・所要時間・児童への不利益のなさ等について説明してもらい、調査への協力が可能かどうかを確認
場所・方法	面接場所	学年主任らの判断により、A校は児童らが慣れ親しんだ所属クラスの教室で行った。B校はプライバシーが保たれる相談室（スクールカウンセラー等が使用する教室）で
	面接時間	調査協力者の帰宅が遅くならないよう、家庭訪問週間に合わせ、午前授業が終了した放課後に実施。
	面接方法	面接者と調査協力者が対面に向かい合うように座った。同意が得られた場合は録音した。
面接内容	導入	①挨拶・自己紹介、②面接協力に対する感謝の表明、③大まかな面接の目的、④プライバシーの保護
	主要	①仕事以外で将来やりたい、あるいはやっているだろうなどと思うことはどんなことか。 ②どんな仕事をしたいと思っているか。 ③それらをやりたいと思うようになった理由や経緯は何か。
	終了	（※質問紙で得られた記述回答を見ながら質問を補足）研究協力に対する感謝の表明。

## 倫理的配慮

調査協力者は、各学級の出席名簿とクジを用いて無作為に抽出した。クジの内容は、出席名簿の出席番号に基づき、一の位（0～9）を記したクジと十の位（0～3）を記したものを用意した。一の位と十の位のクジをそれぞれ一回ずつ引き、出た数を出席名簿の番号と照らし合わせ、該当した児童を調査対象者とした。男女の人数に偏りが出ないように、各小学校男女3名ずつになるよう抽出した。調査協力者の抽出は児童らの学級担任の目の前で行い、抽出された児童が、あらゆる面で調査可能かどうか、学級担任から情報を得て、調査実施の可否を検討した。学級担任との検討の結果、抽出された児童の中には身体の不自由や家庭状況などの理由により、調査実施不可となった児童もいた。その際には、新たに調査協力者を抽出し直した。また、学級担任を通して事前に児童らの保護者に連絡をし、調査の目的や自由意志による参加であること、いつでも中断して良いことを児童に伝える旨を説明し、調査への協力依頼を行った。保護者への説明・依頼の中で許可を得ることのできなかつた児童が1人出たため、男女比は6:5となった。さらに、児童らには、調査（面接）を行う際、倫理的配慮として、参加は任意であること、参加をしない場合にも不利益は一切生じないことを口頭で説明した。

## 分析方法

質問紙から得られたテキストデータおよび半構造化面接で得られた逐語録をテキストマイニングによって分析した。テキストマイニングを用いた理由は、以下のとおりである。まず、テキストマイニングの特徴として、自由記述という大量の質的データを探索的に分析することができる点が挙げられる。さらに、予め設定された基準によってではなく、記述された語に即して分析することができる点や、記述された語そのものだけでなく、組み合わせられた語同士の関係も分析することができる点も特徴として挙げられる。これらの特徴は、児童らが抱く将来展望の具体的内容や、そうした展望内容に影響を及ぼす要因を検討するという本研究の目的に適していると考えられる。テキストマイニングに

よる分析は、フリーソフトウェアのKH Coderを用いた。分析手続きは、樋口（2014）と石田・金（2012）に準拠した。なお、分析の際、極力恣意性を排除するよう配慮した。具体的には、コーディングする際は、原文を確認しコーディングが原文の文脈に即しているかを確認したうえで、心理学を専門とする研究者と筆者の合議により決定を行うという手続きをとった。また、本研究では、調査の際に、最初に質問紙を実施し、次に半構造化面接を実施した。よって、本研究では、質問紙への記述回答と調査者との半構造化面接で得られた口頭回答を分けて、それぞれに分析を行った。以下より、テキストマイニングによる分析を行うための事前準備の内容について述べる。

### a) 語の抽出

#### ①語の整理・統制

記述されたデータのうち、誤字脱字があったものを訂正し、「子ども」と「子供」など、別表記ではあるが同じ意味を表す語の表記を統一した。次に、記述・口頭回答で見られた「家族」という語を、現在の自身が所属する家族と、将来、自身が形成する家族とが、それぞれ明確に分かるように、前者についての回答は「家族（現在）」とし、後者についての回答は「家族（未来）」と表記を統一した。

#### ②語の取捨選択：品詞による選択

話し言葉や書き言葉などの自然言語で書かれた文を言語上で意味を持つ最小の単位、つまり形態素に分け、それぞれの品詞や変化などを判別する形態素分析を行うため、品詞別に抽出された抽出語リストを基に、方言を含めた不明な語句を整理し、文脈上意味をもたない言葉を取り除いた。その結果、記述回答では209種類の語が抽出され、口頭回答では428種類の語が抽出された。解釈可能性の観点から、記述回答の分析は3回以上出現のあった28語を、口頭回答の分析は7回以上出現のあった30語を分析対象とした。さらに、分析の対象とならない品詞を語の取捨選択コマンドにて除外した。記述回答により得られたデータのうち、分析対象から除外した品詞は、未知語と動詞（「思う」）であった<sup>2)</sup>。動詞の「思う」は頻出率が最も高く、後述する次数中心性も最高値であったが、他の

語同士の繋がりをより詳しく検討するため、分析の対象から除外した。また、口頭回答により得られたデータのうち、分析対象から除外した品詞は、動詞（「思う」）と名詞C（「歳」）であった。除外した理由は、記述回答の動詞（「思う」）と同様である。

### ③語の取捨選択：強制抽出する語の指定

TermExtractにて抽出した複合語リストを精査し、不適当な複合語を整理した。不適当な複合語とは、たとえば「子どもたち」という語が「子ども」「たち」の2語に分けて抽出される場合を指す。「子どもたち」が1語として抽出されるように強制抽出すべき複合語を取捨選択コマンドにて強制抽出語として指定した。

### b) コーディング

分析対象とした語について、同じ意味の異なる表現や概念的に類似したものをまとめるコーディングを行った。コーディングは、コーディング・ルール（抽出された語をコーディングす

るためのルール）を作成しながら行われた。コーディング・ルールに沿ったコーディングが回答の原文と一致して行われているかに関して信頼性を担保するために心理学を専門とする研究者と筆者で協議しながら、より適切で包括的なコーディングになるように検討を行い、コーディングを行った。その結果、Table 2のとおり、10個のコードが作成された。

### c) 共起ネットワーク

児童がどのような将来展望を抱いているかを検討するため、得られた回答の内容に注目した。回答内容を詳しく見ることで、将来展望やその理由（背景）の検討が可能となる。解釈の手段として、抽出されたそれぞれの語（node）の共起ネットワーク図を作成した。これにより、どのnode同士が共起しやすいかという、node間での結びつきの強さを検討することが可能となる。共起ネットワーク図において、それぞれのnodeがネットワーク構造の中でどの

Table 2  
コーディング結果

コード名	コーディング・ルール	含まれる単語例
モデル	回答者がモデルとしている人物	琉球ゴールデンキングス、コーチ <sup>a)</sup> 、具志堅用高
進学	進学先として希望している学校	S高、F高、K高、Y高、農業高校、大学、専門学校、専門、高校
職業	就きたいと考えている職業	保育士、飼育員、サッカーのコーチ、自分のお店、自分の会社、教師、プロ選手、航海士、海上保安官、珊瑚護研究センター、先生、居酒屋、旅館の女将、ツアー、監督、製糖工場
アルバイト <sup>b)</sup>	就職ではない。ただし、社会的立場は希望している状態	バイト、居酒屋、ヨットクラブのコーチ、ファミマ
生活拠点地 <sup>c)</sup>	将来、住みたい・生活したいと思っている地名	船浦、石垣、和歌山、沖縄本島、那覇、県外、都会
スポーツ	スポーツの一種として存在しているもの	バスケット、テニス、サッカー、野球
欲しいもの	生活必需品ではないが、所持していると生活が豊かになるもの	車、ヨット、船、車の免許、水上バイク、バイク
子ども	回答者の子どもを表す表現	自分の子ども、子ども
帰郷	地元に戻り、そこで生活を営むという表現	戻りたい、戻る、戻って
孫	回答者の二親等以上の子孫	孫、ひ孫

a) 「テニス部やバスケット部を教えたい。」など、将来的に部活のコーチを希望していると捉えられるもののみ、コーディングを行った。

b) 「バイトをしている。」、「居酒屋でバイトしてる。」、「小遣い稼ぎで働く。」など、アルバイトを本職と別の位置づけ、あるいは金銭面の補助的労働として考えていると捉えられはるもののみ、コーディングを行った。

c) 「沖縄本島に戻るかも。」、「和歌山で結婚をして、住む。」など、明らかにその地域を生活の拠点にしたと考えていると捉えられるもののみ、コーディングを行った。

程度中心な役割を果たしているかを確認するため、次数中心性による色分けを行った。次数中心性とは、当該のnodeが他のnodeとどの程度多く共起しながら出現しやすいかを示す指標である。次数中心性の数値が高いほど、他のnodeと幅広く結びついているということを意味する。本研究において、次数中心性の数値が高いnodeは、児童の将来展望においてより中心的な役割を担っていると解釈可能である。

d) クロス集計

児童が抱く将来展望の内容を検討するため、得られた10個のコードについて、発達段階ごとに発語数を集計した。発達段階はエリクソンの心理社会的発達段階にしたがい、13～22歳を青年期、23～34歳を前成人期、35～60歳を成人期、61歳以降を老年期の4段階に分けた。コードごとに、どの発達段階で出現率が高いかを検討するため、クロス集計表を作成した。期待度数が0になるセルがあり、期待度数が5未満になるセルが全体の20%を超えたため、フィッシャーの直接確率法を実施した。また、クロス集計表が想定より大きくなった場合には、フィッシャーの直接確率法と同様の確率的数値計算手法であり、かつ解析的に取り扱うことが困難な確率分布の計算に有効に活用できる数値

解法であるモンテカルロ法シミュレーションによる直接確率計算を行った。発達段階間で有意な差がみられたコードについては、どの発達段階で差があったのかを検討するために残差分析を行った。

結果

1. 記述回答の分析

1-1. 抽出語同士の共起ネットワーク

記述回答において抽出された語のうち、出現頻度が3以上の語 (Table 3) について、共起ネットワークにより可視化した (Figure 2)。以下に、その結果を述べる。なお、抽出された語は [ ] 内に示し、具体的な回答内容は「 」で示した。中心性は [なる] が最も高く、その次に [する] が高く、さらにその次に [子ども]、[自分]、[やる] が高かった。しかし、[なる] には、どのnodeとも強い共起関係はみられず、[する] は、[勉強]、[仕事]、[結婚] と中程度の共起関係がみられた。[する] と [勉強] の共起では、「勉強をしている」という勉強中であることを表す回答のみ存在していた。[する] と [仕事] の共起では、「仕事をしている」という労働中であることを表す回答から、「仕事から解放された感じが嬉しくなっている」という労働を終了してい

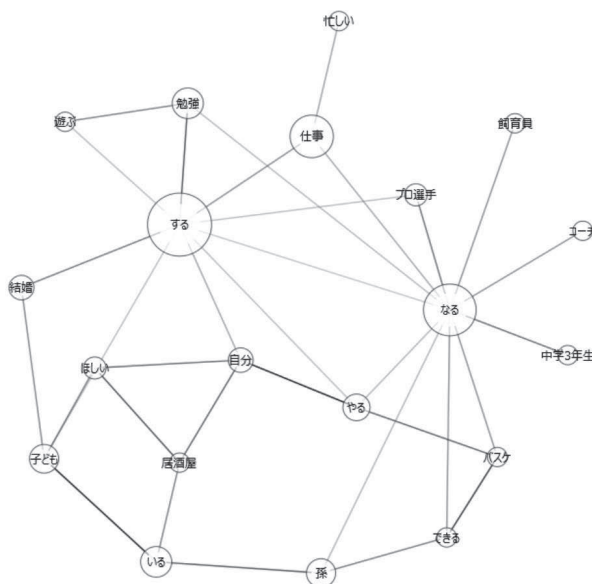


Figure 2 将来計画における共起ネットワーク (記述回答)

Table 3  
頻出語リスト

抽出語	出現回数
仕事	16
勉強	8
子ども	7
孫	7
結婚	5
自分	5
夢	5
プロ選手	4
コーチ	3
バスケット	3
居酒屋	3
飼育員	3
中学3年生	3
忙しい	3
遊ぶ	3

る状態を表す回答まで存在していた。[する]と[結婚]の共起では、単に「結婚している」ことを表す回答と、「結婚して、子どもを産んでいる」という結婚後の生活のことまで述べている回答があった。[子ども]は[いる]と強い共起関係にあり、たとえば、「子どもが2, 3人いる」という回答例があった。[自分]と[やる]は互いに強い共起関係にあり、「自分のやりたいことをやる」という回答例が存在した。

## 1-2. クロス集計

抽出された10個のコードごとに、どの発達段

階で出現率が高いのかを検討するため、フィッシャーの直接確率法を実施した。その結果をTable 4に示した。なお、帰郷コードは総回答数が0であったため、分析の対象外とした。分析の結果、「進学」、「生活拠点地」、「子ども」、「孫」の4つのコードにおいて、発達段階間で有意な差が見られることが示された ( $p = .002$ )。残差分析を行った結果、「進学」は特に青年期での出現率が高く、「生活拠点地」と「子ども」は前成人期で、「孫」は老年期での出現率が高かった。

Table 4  
記述回答クロス集計結果

コード名	発達段階				合計
	青年期	前成人期	成人期	老年期	
モデル	0 (0.00%)	1 (3.70%)	3 (7.89%)	0 (0.00%)	4 (2.88%)
進学	<b>4 (11.11%)</b>	0 (0.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	4 (2.88%)
職業	3 (8.33%)	2 (7.41%)	6 (15.79%)	2 (5.26%)	13 (9.35%)
アルバイト	1 (2.78%)	0 (0.00%)	2 (5.26%)	1 (2.63%)	4 (2.88%)
生活拠点地	0 (0.00%)	<b>1 (3.70%)</b>	0 (0.00%)	0 (0.00%)	1 (0.72%)
スポーツ	1 (2.78%)	1 (3.70%)	3 (7.89%)	1 (2.63%)	6 (4.32%)
欲しいもの	1 (2.78%)	1 (3.70%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	2 (1.44%)
子ども	0 (0.00%)	<b>4 (14.81%)</b>	3 (7.89%)	0 (0.00%)	7 (5.04%)
孫	0 (0.00%)	0 (0.00%)	2 (5.26%)	<b>6 (15.79%)</b>	8 (5.76%)
総回答数	36	27	38	38	139

注. 総回答項目数にはコーディングされた単語を有していない項目も含まれているため、各発達段階の ( ) 内の%を合計しても100%とはならない。

フィッシャーの直接確率法,  $p = .002$

## 2. 口頭回答の分析

### 2-1. 抽出語同士の共起ネットワーク

口頭回答において抽出された語のうち、出現頻度が7以上の語 (Table 5) について、共起ネットワークによる可視化を試みた (Figure 3)。表記はFigure 2と同様である。中心性は[沖縄本島]が最も高く、次に[戻る]と[一緒]が高かった。[沖縄]は[戻る]と強い共起関係にあり、さらに[戻る]は[故郷<sup>3)</sup>]と強い共起関係にあった。[沖縄本島]と[戻る]の共起では、「(結婚や年老いた後に) 地元の沖縄本島に戻る」という回答が存在した。[戻る]と[故郷]の共起では、「親がいるから故郷に戻る」、「地元だから早めに故郷に戻る」というような、親の存在や

出身地であることを理由とする回答が存在した。また、「故郷に戻って働く」、「結婚したら故郷に戻りたい」といった、生活の拠点を故郷とするような回答も存在した。しかし、1回答のみ、「故郷に戻ることはない」という回答も存在する。また、中心性は決して高くないが、[家]と[店]は[建てる]と強い共起関係にあり、[店]は[自分]とも強い共起関係を示した。[家]と[建てる]の共起関係には、「一軒家だと子どもがいるとずっと遊べるから、自分の家を建てたい」、「奥さんと2人暮らしをする家を建てる」というような、未来の家族との生活を展望した回答が存在した。[店]と[建てる]の共起関係には「自分の店を建てる」という回答が存在し、



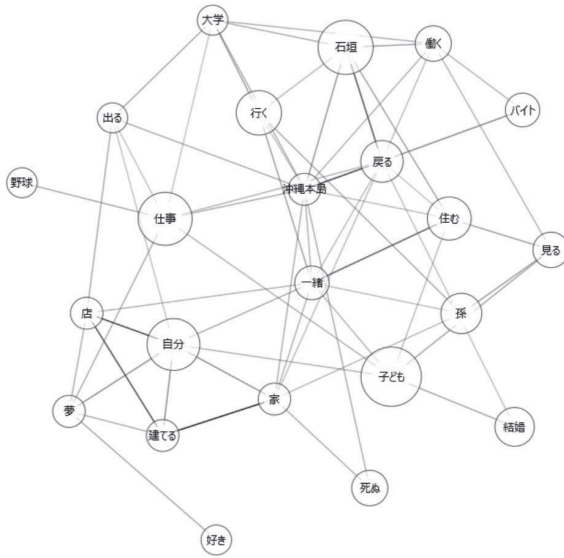


Table 5  
頻出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	29	バイト	9
石垣	24	一緒	9
仕事	23	沖縄本島	8
自分	22	家	8
行く	16	建てる	8
住む	15	店	8
戻る	14	夢	8
孫	13	好き	7
結婚	12	出る	7
見る	10	大学	7
死ぬ	10	野球	7
働く	10		

Figure 3 将来計画における共起ネットワーク（口頭回答）

[店]と[自分]の共起関係には「午前中は自分のお店で、午後は子どもと過ごす」や「自分のお店は体力的に55歳でやめているかも」という回答が存在した。出現度数の高い語は、[故郷]、[子ども]、[仕事]、[自分]であった。

2-2. クロス集計

記述回答と同様に、口頭回答においてもクロ

ス集計表を作成したところ、記述回答では見られなかった帰郷コードに分類される回答が見られた。回答分布の偏りについて統計的に検討するため直接確率計算を行った。その結果をTable 6に示した。分析の結果、「モデル」、「進学」、「生活拠点地」、「スポーツ」、「子ども」、「孫」、「帰郷」の7つのコードにおいて、発達段

Table 6  
口頭回答クロス集計結果

コード名	発達段階				合計
	青年期	前成人期	成人期	老年期	
モデル	0 (0.00%)	0 (0.00%)	4 (6.15%)	2 (3.45%)	6 (2.33%)
進学	17(33.33%)	1 (1.20%)	1 (1.54%)	0 (0.00%)	19 (7.39%)
職業	5 (9.80%)	9 (10.84%)	8 (12.31%)	3 (5.17%)	25 (9.73%)
アルバイト	3 (5.88%)	2 (2.41%)	4 (6.15%)	2 (3.45%)	11 (4.28%)
生活拠点地	6 (11.76%)	22 (26.51%)	9 (13.85%)	6 (10.34%)	43 (16.73%)
スポーツ	1 (1.96%)	2 (2.41%)	6 (9.23%)	0 (0.00%)	9 (3.50%)
欲しいもの	1 (1.96%)	2 (2.41%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	3 (1.17%)
子ども	0 (0.00%)	14 (16.87%)	13 (20.00%)	2 (3.45%)	29 (11.28%)
孫	0 (0.00%)	1 (1.20%)	2 (3.08%)	11(18.97%)	14 (5.45%)
帰郷	0 (0.00%)	9 (10.84%)	2 (3.08%)	3 (5.17%)	14 (5.45%)
総回答数	51	83	65	58	257

注. 総回答項目数にはコーディングされた単語を有していない項目も含まれているため、各発達段階の( )内の%を合計しても100%とはならない。

フィッシャーの直接確率法,  $p=.00$

階間で有意な差が見られることが示された ( $p = .00$ )。残差分析の結果、「モデル」は成人期での出現率が高く、「進学」は青年期での出現率は高かったが、前成人期、成人期、老年期での出現率は低かった。「生活拠点地」と「帰郷」は前成人期での出現率が高く、「スポーツ」は成人期での出現率が高かった。「子ども」は青年期での出現率は低かったが、成人期での出現率は高く、「孫」は前成人期での出現率は低かったが、老年期での出現率は高かった。

## 考察

本研究の目的は、沖縄県の離島に住む児童らが抱く将来展望の内容を把握し、そうした展望を抱くようになった背景(理由)について検討を行うことであった。沖縄の離島に住む小学校6年生の児童を対象に、将来の展望に関する質問紙および半構造化面接を実施した。そこで得られたデータを共起ネットワークとクロス集計によって分析した。

### 1. 記述回答について

共起ネットワークの結果に注目すると、最高値の中心性を示した[なる]は、どのnodeとも強い共起関係はみられなかった。しかし、児童らが「やりたい職業(職業コードに属する語)」として回答した複数の職業と弱い共起関係にあり、その一つひとつは飼育員やコーチといった具体的な職業であった。また、今回は出現頻度が2以下であったために分析からは除外されたが、「海洋研究所職員」という職業の回答もあった。一方、[なる]の次に中心性の高かった[する]は、[勉強]、[仕事]、[結婚]と中程度の共起関係がみられた。特に[仕事]では労働中であること表す回答から、退職して労働から解放されている状態を表す回答まで存在していた。同じように[結婚]では婚姻中であることを表す回答から、出産し、何人我が子を得ているかといった状態を表す回答まで存在していた。この結果は、観光業や農業が盛ん故にどこかの企業へ就職という形の就労ではなく、自営業という個人事業主として就労する機会にあふれている沖縄の離島で暮らす子どもならではの将来展望といえるだろう。子どもたちは個人事業主と

して就労する大人と関わる機会が多いため、ぼんやりと「就職して働く」という将来展望よりも具体的な職業をそれぞれ展望するのかもしれない。共起ネットワークで[なる]がどのnodeとも弱い共起関係しかみられなかったのは、子どもたちが抱く将来の職業像がバラエティに富んだためだと推測する。また、展望する未来の距離が近い者もいれば遠い者もあり、これはLewin(1951)が示している児童期から青年期への時間的展望の発達と一致する。

### 2. 口頭回答について

共起ネットワークの結果に注目すると、最高値の中心性を示した[沖縄本島]と[故郷]は、[戻る]と強い共起関係があった。得られた回答から、児童らは「故郷に戻る」あるいは「戻らない」という将来展望を抱いていることが推察できる。また、「戻る」ということは、その前に一度「出る」という選択を取っていることになる。共起ネットワークを見ると、中心性はそこまで高くはないが、[仕事]と[出る]と[大学]がそれぞれ共起関係を示している。そして、クロス集計表では進学コードが青年期で最も有意に高い出現率を示し、前成人期になると生活拠点地コードと帰郷コードの出現率が有意に高くなっている。ここから児童らは、青年期になると仕事(就職)や大学進学で島を離れ、前成人期になると沖縄本島あるいは島に戻る、戻らないという展望を抱いていることがわかる。その展望が確固たるものでなくとも、青年期・前成人期にはそういう選択に迫られるだろうという未来予想を立てている。これは北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学グループ(2001)で示された、小学6年生は未来の自己をイメージせず、過去の自己と比較して現在の自己を特徴づけるという結果とは異なる。たとえば、本州に住む人であれば、地方出身者であっても「地元へ帰省する」ということが今後の自分のライフスタイルに影響を与えるとは考えにくい。それに対し、沖縄の離島の子どもたちは、[故郷]と[戻る]と[住む]が共起関係にあるように、「地元へ帰省する」ということが自分のライフスタイルに大きな影響を与え得るということを感じたうえで将来を展望している。

### 3. 総合考察

以上より、沖縄の離島に住む児童らが抱く将来の職業像はバラエティに富んでいることが示唆された。一方、青年期・前成人期には島を出る・出ない、島に戻る・戻らないの選択に迫られると未来予想を立て、「地元へ帰省する」ということが自分のライフスタイルに大きな影響を与え得るということを感じたうえで将来を展望している可能性があることが示された。最後に、本研究には記述回答と口頭回答の発達段階間における各コードの出現数について、比較・検討を行うという課題が残っている。また、記述回答ではみられなかった帰郷コードや共起ネットワークでの生活拠点地に関するnodeが口頭回答においてのみみられたことについて、質問紙を用いての記述回答では、児童らが「将来のこと＝なりたい職業」と捉えたための可能性が大きい。この点に関しては、教示文などを工夫することで、記述回答と口頭回答で出てくる将来展望に差があるのかどうかを検討していく必要がある。今後の展望として、将来計画性を沖縄の離島在住の児童と首都圏内在住の児童との間で比較し、検討していきたい。

### 引用文献

- 古川 雅文・鈴木 教夫・内藤 勇次(1993). 児童の将来展望に関する研究その2—Self-esteemとの関係— 日本教育心理学会総会発表論文集, 35.
- 樋口 耕一(2014). 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— ナカニシヤ出版
- 北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学グループ (2001). 特集 現代の子どもと「人生イメージ」—檜山・上ノ国町の地域調査報告— 教育臨床心理学研究(北海道大学大学院教育学研究科教育臨床心理学研究紀要), 3.
- 石田 基広・金 明哲(2012). コーパスとテキストマイニング 共立出版
- 柏尾 眞津子(1997). 女子学生の目標と時間的展望

の関連 人間科学(関西大学大学院), 49, 139-149.

- Lewin, K. (1951). Field theory in science. Ed. Dorwin Cartwright. New York: Harper & Row.
- (レヴィン, K. 猪股 佐登留(監訳)(1974). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 文部科学省(2017). 小学校指導要領 文部科学省告示, 60, 102.
- 根ヶ山 光一(2012). アロマザリングの島の子供たち—多良間島子別れフィールドノート— 新曜社
- 尾崎 仁美(1999). 青年の将来展望に関する研究—将来展望の重要性による比較— 日本教育心理学会総会第41回総会発表論文集, 41, 411.
- 鈴木 努(2009). ネットワーク分析 金 明哲(編)Rで学ぶデータサイエンス8 共立出版
- 鈴木 教夫・内藤 勇次・古川 雅文(1993). 児童の将来展望に関する研究その1—児童のライフステージにおける将来像— 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 35, 511.
- 都築 学(1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41(1), 40-48.
- 都築 学・白井 利明(2007). 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版

### 脚注

- 1) 質問紙は13歳、15歳から100歳までの5年毎の目盛をふって作成したが、Figure 1ではスペースの都合上、記載を省いた。
- 2) 「副詞」「助詞」「助動詞」は内容語ではないため、通常であれば分析対象から除外しても問題はないが、本研究では児童が抱いている将来展望をより多面的に把握したかったため、文章の前後関係などを確認するために除外しなかった。
- 3) 本来は調査対象とした島の名前であるが、倫理的配慮の観点から匿名化を図り、「故郷」とした。

—2022年9.23.受稿, 2022年11.24.受理—

## A Study on the Future Time Perspectives of Children on Remote Islands in Okinawa Prefecture

Nozomi Uchima

Mejiro University, Graduate School of Psychology

Hiroyuki Konno

Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2023 vol.19

### **【Abstract】**

This study qualitatively examines the content of future time perspectives of children in remote islands in Okinawa Prefecture. Concretely, the content of the future time perspectives held by children living in remote islands is grasped, and the background (reason) for holding such future time perspectives is examined. In this study, the survey was carried out by questionnaire and semi-structured interview to grasp how children view the future as more multifaceted. Based on the text data obtained from the questionnaire and the verbatim records obtained in the interview, the text mining was carried out, and the number of utterances of the code extracted from the utterance in the interview was totaled for each developmental stage. As the result, the results suggest that children living on remote islands in Okinawa have a wide variety of future occupations. On the other hand, in adolescence and pre-adulthood, when faced with the choice of leaving or not leaving the island and returning or not returning to the island, they made future predictions, indicating that they may look forward to the future with the feeling that returning to their hometown can have a great impact on their lifestyle.

**keywords** : future time perspectives, Okinawa, remote island, text mining